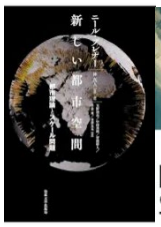
国際社会学部

平田　周

Shu Hirata
現代世界論コース
グローバルスタディーズ、フランス語圏現代思想



思想史研究とは

思想史（History of Ideas）は、哲学の下位区分とされることもありますが、おおまかに言えば、あるアイデアの歴史的成り立ちとその意味の変遷を考察するにあたって、それが生まれたテクスト〔文献〕・それが論じられるインターテクスト〔関連文献〕・それらのコンテクスト〔時代背景〕を精査していくものです。扱うアイデアに応じて、狭義の哲学の文献だけではなく、さまざまなジャンル、学問分野を横断して議論を構想できる刺激的な研究領域です。そうした知的探求の指針となるのは、アクチュアルな関心をもって問いかける力です。思想史は問いかける主体の関与なしには成立しませんし、また単に私的事柄としてではなく、公的事柄としても取り組まれる必要もあります。問いは一度で適切なかたちで提起されるものではありません。それゆえよく「読む」だけでなく、「語り合う」ことも必要なのです。

研究紹介

これまでの研究では、アンリ・ルフェーヴル（1901-1991）の空間論の形成について取り組んできました。ルフェーヴルは哲学者から社会学者とみなされ、社会学者から哲学者とみなされることもあり、あまり研究対象とされてこなかったのですが、「時間」や「歴史」が特権的な考察対象とされてきた19世紀以降のヨーロッパの哲学において、彼が「空間」や「地理」を哲学的・社会的分析対象に据えたことの意義は大きいです。

より最近の研究では、ルフェーヴルの空間論的視点を掘り下げるため、エコロジーやポストコロニアリズムと関連した議論との接続に関心があります。ひとつは、ルフェーヴルから着想を得て、N・ブレナーが提起した「プラネタリー・アーバニゼーション〔惑星都市化〕研究」です。従来、都市研究は、都市と農村というかたちで、地理的に境界づけられた領域を分析対象としていました。それに対して、都市の活動を成り立たせている食・エネルギー・原材料の供給、廃棄物の処理などは、都市の外部にある地域に依拠している以上、都市研究は、これまで都市とみなされてこなかった地域をも分析対象としなければならない、これがプラネタリー・アーバニゼーション研究によって提起された論点のひとつです。こうした都市化とグローバル化のダイナミックな相互作用が地球の生態系に及ぼす影響に関する理論的考察と関連して、もうひとつの議論の接続点であるポストコロニアル理論の代表者A・ンベンベの議論に関心があります。とりわけ、「白人」と「黒人」というアイデンティティ政治を超えて、人間と動物、さらには生物と無生物を超えた「地球共同体」を提起する政治的想像力から現代の社会にどのような理論的可能性が引き出せるのかを検討しています。

担当授業

- **世界認識論概論**
- **グローバル・スタディーズ**
- **基礎演習**
- **現代世界論研究**
- **協働分野セミナー**

関連する分野

- **思想史、政治学、法学、社会学**
- **サスティナビリティ研究**

出版物

著書

- 『予測と創発―理知と感情の人文学』（分担執筆）
- 『惑星都市理論』（仙波希望と共編著）

翻訳（共訳）

- A・ンベンベ『地球共同体―最後のユートピアについての省察』
- N・ブレナー『新しい都市空間―都市理論とスケール問題』
- R・バルト『恋愛のディスクール―セミナーと未完テクスト』
- G・シャマユー『人間狩り―狩猟権力の歴史と哲学』
- K・ロス『もっと速く、もっときれいに―脱植民地化とフランス文化の再編成』
- C・ルフォール『民主主義の発明』

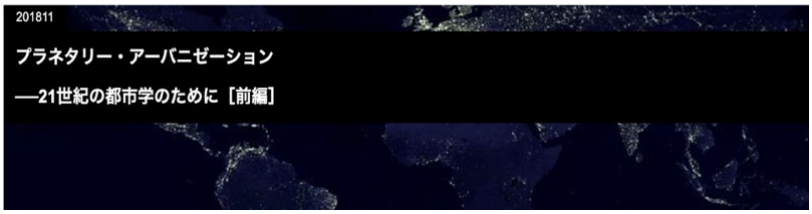
国際社会学部

グローバル・スタディーズゼミ

どのようなゼミか

思想は、それを特段意識しようともせずとも、あらゆる物事の認識の前提をかたち作っています。それは、日々の生活を違った視点で捉え直す作業にもなれば、政治的な水準では、その違いが対立の原因になることもあります。このゼミでは、日常生活から一歩引いたかたちで、グローバル化が世界の分断を強めていると呼ばれるような現代において、思想がどのような役割を果たしているのかを考えていきます。具体的には、主に英語圏・仏語圏のテクストを中心に扱います。

1980年代以降、グローバル化という言葉が流通するようになってから、グローバルなスケールと、それ以前には支配的であったナショナルなスケール、さらにはローカルや都市のスケールとはどのような関係を結んでいるのかということが議論されてきました。他方で、同じ時期に、フランスを震源とする「ポストモダン」「ポスト構造主義」と呼ばれる思想潮流が「フレンチ・セオリー」として英語圏に導入され、人文学のみならず社会科学の理論的言説を一変させました。毀誉褒貶のある思想の流れですが、他方でJ・P・サルトルらを含めた戦後のフランス哲学・思想が、哲学史的にはドイツ観念論に匹敵する刷新をもたらし、これまで考えられてこなかった領域を開拓し、ジェンダー研究やポストコロニアル研究など新領域を作り出すことに貢献してきたことも確かです。
本ゼミでは、こうした思想を分析の「道具箱」としながら、現代のグローバル化の諸相を考えたいと思います。



卒論

■

おススメの本

- 永井玲衣『水中の哲学者たち』
- 千葉雅也『現代思想入門』
- 西谷修『夜の鼓動に触れる一戦争論講義』
- 桑田学『環境と社会思想』